

はれやか

2021 No. 22

Spring

岩藤医療保健福祉グループ

ケアハウスあかいわ フラット。中庭カフェ

岩藤医療保険福祉グループ
医療法人 知誠会
社会福祉法人 赤磐中央福祉会

理事長 岩藤 知義



今年の春はコロナの感染拡大もあり心は冷えて切っていますが、草木の開花に感動と生命力の強さを感じられます。一方梅雨入りは、統計史上2番目に早い記録となり、異常気象による災害の発生が危惧されます。

コロナの発生からはや一年半になります。ウイルスは変異を重ねて強毒化しています。エアロゾル感染は感染拡大を早め、緊急事態宣言も3回目になりました。この間、世の中は大きく変わりました。マスク着用が日常化し、オンラインの普及、AI（人工知能）、脱炭素化の進展はまさに「令和の産業革命」です。今、我々はコロナのピンチがチャンスに変わる瞬間を体験しているのです。さらに宇宙の覇権争いも進み、コロナを強大な権力で抑えた隣国は我が国の脅威になりました。

現在も、コロナの感染者は増加の一途をたどり、医療現場では病床が逼迫し、命の選択が迫られています。入院もできずまま亡くなってしまいう医療崩壊が始まっています。コロナパンデミックは未知の大災害であり危機管理に英知ある対策が求められます。しかし有事の緊張感を国民に伝えられず、私権制限も難しいならば、自然災害と同じく権限を自衛隊に譲るべきでしょうか。

このような事態が起きる前、国は医療費削減のために「地域医療構想」として病床削減

を議論してきました。しかし、病床逼迫の今こそ病床機能による超急性期、急性期、回復期の連携が急務になります。平常時ではともかく緊急事態下では重傷者を治療するまで一貫して診るのではなく、超急性期を脱すれば後方病院に治療を委ねる。そして次の重症者を受け入れるという、病院間の機能調整がスムーズにできれば病床利用率は下がります。いつ出番が来るかバトンを待っている中小病院、有床診療所があるのです。受け入れ可能な空床を明確化するシステムと調整役が必要です。さらにコロナの受け入れは公立病院主体で、民間病院は消極的との批判があります。しかし歴史的にも終戦直後の病床不足に対処するためにGHQが新設した「有床診療所」が、日本独自の医療単位として地域医療の中核を担ってきました。その後進化した民間病院が全体の7割を占めている事を知っていただきたい。

現状では最大の特效薬はワクチンです。政府は全国で一日百万回接種を目標に取り組んでいます。私もはこの国難を乗り越えるため、使命を持って臨んでいます。我が国の接種率は残念ながら海外と比べて大変遅れています。早急に出来る限り多くの皆様にワクチン接種を受けていただきたい。当院は高齢者のワクチン接種が終わるまでは、日曜日も休まず対応しています。かかりつけの患者様だけでなく、地域の皆様のワクチン接種を広く受け付けています。まだ接種を受けておられない方はご連絡をお待ちしています。一方、受診抑制で進行がんが増加しています。早期発見や病状の悪化を防ぐためにも必要な受診まで自粛しないようお願いいたします。感染対策は充分に実施していますのでご安心ください。

今後コロナ感染は繰り返されることが予想されますが、緊張感をもって対処していただくと共に、一日も早くマスクのない日常生活が戻り、オリンピックも無事に終わる事を念じています。